

嵯峨清凉寺釋迦像封藏品の宗教史的意義

塚 本 善 隆

近頃、嵯峨清凉寺の釋迦如來像——いわゆる「優填王瑞像」から、その將來者である裔然が宋の太宗雍熙二年（九八五）八月十八日に封藏しておいた五色絹製五臟、百餘種の絹の小片を始め、雍熙二年刊金剛般若經、延曆二十三年寫金光明最勝王經（末に裔然署名あり）、小字法華經（裔然の弟子嘉因捨）水月觀音像線刻銅鏡、截金文様ある雲母板、碧ガラス容器、唐・五代・北宋の銅錢、鈴、玉、銀製釧子、靈山淨土變相・文殊菩薩・普賢菩薩・彌勒菩薩の版畫及び裔然の入宋造像の經過を述べた願文、同學義藏と手印して取交した現當二世結緣狀その他の興味深い諸文獻が、約千年ぶりに出現した。これは、諸般のアジア文化史研究に貴重な資料を提供するのみならず、從來いろいろと論議せられていた嵯峨釋迦像製作問題等も明かにせしめるものであるし、特にこの釋迦像將來の日本佛教史上にもつ興味深い意義も考えしめるものである。

例えば

(1) 裔然が弟子嘉因、定緣、康城、盛算、並に二童子（宋

で得度して祈乾、祈明）を伴い宋商の船で、圓融天皇永觀元年（九八三）八月一日九州を發し、同年十八日台州封開江浙に到着以來、天台山、泗州普光王寺を経て汴京封開に入り、宋の太宗に謁して意外の優遇をうけ、五臺山、洛陽白馬寺、龍門廣化寺等を巡禮し、新雕の勅版大藏經を賜つて台州に歸來、ここで未だ日本に渡來していない優填王像を傳える爲に、資財を投じ、台州僧正開元寺寺主を始め開元寺諸僧並びにシナ僧俗男女の協力をうけて「優填王瑞像」摸刻を完成した經過の大意が明にされる。（日本國東大寺法濟大師賜紫裔然入五藏願文）

(2) 胃白 心赤 肝赤 膽紺 肺紅 肚錦 賢紫 咳白

腸白班 背皮白（尼清曉の癰病願文を記す）

等は東洋醫學史の貴重資料であるのみならず、その絹は數百の絹小片と共に織物史上の重要資料である。正倉院に存する唐絹から、南宋元明の絹までに飛ぶシナ織物史上の實物の空白が、この北宋封藏の絹によつてつながれる。

(3) 表に「承平八年正月廿四日のひつじのときむ」、裏に

「まる……とこ丸」と平假名まじりに書いた尖細の細長い小紙片がある。喬然の生年月日である。蓋し喬然の臍の緒につけてあつた紙片かと推察せられるが、この平假名は御堂關白日記紙背に存するものよりも古く、現存最古の平假名の實例の一として假名發達史上に新資料を加える。

(4) 銅版の線刻畫、版畫、版經（見返しに釋敎說法圖がある）は、同時代のシナ西邊の燉煌の同類資料に對するシナ東部地域のものである。兩者比較して五代、北宋の繪畫その他の研究によき資料を提供する、等々である。

本稿では封藏品を中心に、釋迦像將來の宗教史的意義を考えてみたい。

(一) 像は雍熙二年七月二十一日着工、同八月十八日完成、その日に五臟その他を封藏した。喬然の願文にいう。

喬然、自慶多生叨逢像運、因聞往昔優填國王、於仞利天、雕刻釋迦瑞像、顯現既留於西土、寫邈或到於中華。以日域之遐邇、想梵容而難覩。喬然捨衣鉢買香木、召募工匠、依樣彫鐫。七月二十一日起功。八月十八日畢乎。

この造像は、喬然の新版大藏經轉讀の行の間に進行した。同願文に

喬然又於今月一日、發心轉讀大藏經、以皇帝乾明節、上扶聖壽、仍答鴻恩、然燭焚香、開函展卷。

とある。この釋迦瑞像彫造は、喬然が極めて重要な決意と敬

虔な態度の中に行つたことが推察される。

背皮と絹小片（肉であらう）に臟腑を容れておさめたのは、この優填王が現在の釋迦佛を像にしたとの經說、即ち「生身じやうしんの釋迦如來」の信仰によつたものであらう。日本佛教界に生身の釋迦佛影を迎えようとするのは、喬然の誓願の宗教事業遂行の爲である。

(二) これを證する第一のものは、封藏せられた喬然壯年期の祕密盟約書、天祿三年（九七二）の義藏との手印二世結緣狀である。天祿三年は喬然三十五歳、義藏二十三歳、二人の東大寺學僧は、生れ難い人に生れ、男子に生れ、あい難い佛教にあい、出家し學僧となり伽藍に住し同學となつた因縁を喜び、十方三世の諸佛乃至天神地祇の前に盟約し、煩惱未斷の凡夫にして悲怒の情滅し難きも、必ず同心協力して京都の西、愛宕山（東の比叡山に對す）に一伽藍を立て釋迦の教を興隆し、來世は彌勒のもとに生れて聞法し、彌勒下生の時にまた此世界に生れて衆生を濟度することを誓願する。その證として一通ずつを作り手印をおして各自所持したものである。東大寺の若輩の二學僧が、密かに他人には知らさず、しかし一切の神佛に誓つて結盟した内容は、夢のような、無謀にも思われるような大事業である。だが熱烈純眞な宗教的情熱のみなきつた青年僧の盟約である。東大寺に學僧となつた二人は、天下の總國分寺である彼らの勅建大伽藍が、新しい比叡

山延曆寺に年々に壓倒せられてゆく情勢が、いよいよ顯著になつた中に立ち上つてゐる。旭日の比叡教團に對する落勢の東大寺教團人の強い抵抗の意識が、東大寺佛教の新都京都へ、而も比叡山と正しく相對する洛西の山への進出意圖となり、結盟誓願狀となつたようである。

(三) 東大寺は奈良朝廷全盛の象徴であり、而もその日本佛教界王座の地位が充實決定した直後に遷都が起り、一舉に地の利を失つた。それに引きかえて、最澄の創建した比叡山上の修道場と新教團が、地の利を占めて時勢にのつた。最澄後半生の懸命の努力は、比叡山に大乘圓頓戒壇設置の運動であつた。これこそ日本佛教界に占める東大寺の特別な地位を奪わんとするものである。天下總國分寺として、鑑真和尚創建の戒壇をもつ東大寺は、受戒得度の僧制の上から日本僧界に君臨し得る地位にある。比叡山戒壇はこれから分離獨立し、而も自ら大乘戒壇と稱し、東大寺を小乘四分律戒壇と貶しさえするのである。東大寺を始め南都佛教は舉つて最澄の主張に反對し、強硬に比叡戒壇創立を阻止して來た。にも関わらず、京都朝廷は最澄の歿後に比叡山圓頓戒壇に許可を與えて、比叡教團を完全に南都佛教の權外に獨立せしめてしまつた。政權なき舊都にあつては、今までの大教團も、新都の新宗團に對抗し難い不利の地位にある現實を、まざまざと特に東大寺教團に知らしめた所以であつた。比叡教團は大乘圓頓

戒壇によつて、東大寺の日本佛教界における權威を後退せしめたのみならず、その後も教義上の問題で對立論争しつづけた。南都對北嶺の宗論は、多少儀式化して行つたとはいへ、宗論の公然行われるかぎり、兩教團の對立抵抗の意識は刺激せられざるを得ない。應和三年（九六三）南都北嶺の名僧二十人を選んで、清涼殿で五日間にわたつて行われた、いわゆる應和の宗論は特に名高い。南都の法藏と比叡の良源とは、論難往復夜に入つたが、翌日法藏をして「公の辯は富樓那の亞、わが訥辯の敵に非ず」と嘆ぜしめたと傳える。法藏は東大寺第五十二、五十三代の別當であり、裔然と手印結盟した義藏の受戒の師である。良源は宮廷と藤原氏との歸依を背景に榮達をかさね、九六五年には天台座主になり、九八一年には大僧正の最高位にと日本佛教界未曾有の昇進をなし、而もこの間延曆寺を飛躍的に完備し、源信、覺運らの學匠を養成して比叡教團の全盛期を招致したのである。東大寺の若い裔然、義藏二學僧が、この旭日の比叡に相對してゐる洛西の愛宕山に建寺して佛教を興隆せんと密かに誓約し二世結縁狀に手印したのは、應和の法論から九年後、正に良源座主の全盛期である。東大寺二學僧の祕密盟約書には、比叡教團に對する激しい抵抗意識が潜流してゐると思われる。

(四) 裔然が入宗の前年に現存の母の法要を修した時の願文（本朝文粹）に

裔然心願、如來可證明、裔然天祿以來、有心渡海……願先參五臺山、欲逢文殊之即身、願次詣天竺、欲禮釋迦之遺跡。

とある。天祿即ち東大寺で彼が義藏と立誓手印した頃から、彼は渡支入竺聖蹟巡禮を企劃していた。天祿以來、祕かに膚身につけていた義藏との手印盟約書が彼の宗教的行動を導いてあらゆる困難を突破せしめて行つた。彼は多くの反對論をおし切り、念誦用と認められる金光明最勝王經即ち金光明護國之寺の根本聖典を所持して入宋した。東大寺裔然は、この日本から將來念誦していた金光明最勝王經を、完成した瑞像に封藏し、また彼は次のように書いた小冊子を封じ込めた。

我今盧遮那、方坐蓮華臺、周匝千華上、復現千釋迦、一華百億國一國一釋迦 各坐菩提樹 一時成佛道 十方恒沙界 分身釋迦文乃至同名釋迦三世三千佛、無量十方三世諸佛 菩薩聲聞緣覺三界天人

明かに總國分寺、盧遮那大佛のもとに修學した東大寺僧の信念と意識との中に釋迦像將來が企圖せられていることを推知せしめる。小冊子には續いて宋の太宗の名をかき次に守平王（圓融天皇）東空太子、皇后康子 一品女親王 賴忠大臣（太政大臣）、兼家大臣（右大臣）、爲光臣、朝光臣、實資、道隆、道兼、諸僧俗繫念人と入宋當時の宮廷公卿の名を列ねている。入宋について援助をうけた人々であろうが、それよりも、この日本へ最初に渡す優填王釋迦像を中心に、彼が歸

朝後に邁進しようとしている事業、即ち義藏と誓約してある愛宕山建寺實現の大業に、是非とも援助してもらわねばならぬと期待している京都の最高權勢であつたわけである。

彼が久しく膚身につけていた義藏ととりかわした祕密盟約の手印狀と、自らの生誕を記念している恐らく親によつて認めておかれた紙片とを納入している所に、彼の決意のほどもうかがわれる。彼はこの特別な釋迦瑞像の成就によつて、彼の生涯の誓願に一期を劃し得たと信じたのであり、これから彼が誓願している宗教事業に、更に決意を新にして邁進することを示しているといえよう。それは釋迦像を奉じて歸朝して以來の裔然の活動が說朝する。

(四) 裔然是寛和二年（九八六）七月一日九州に歸着、翌年正月十七日山城國河陽館に着、ここで中央から山城國守に裔然將來品運搬の命令があつたのに對して、山城國からかような巨多な荷を運ぶ民力の負擔に堪えられないとの反抗訴願が起るなど一もめもあつたが、攝政兼家等の盡力もあつて、雅樂寮派遣の高麗樂に導かれ、七寶舍利塔、五百匣の勅版一切經、釋迦瑞像が山城、河内、攝津の人夫にかつがれ大唐樂に送られて、朱雀大路―二條大路―大宮大路―一條大路―蓮臺寺へと満都の渴仰讚歎の中に盛大な入洛渡御式が舉行された。

八月十八日、瑞像成就の記念日である。裔然是「愛宕山を

以て五臺山と號し、一伽藍を建てて大清凉寺と號し、白梅檀釋迦像を安ぜん」ことを奏請して勅許を得た。華嚴本尊大盧遮那佛の寺の僧は、親しく巡禮をとげてきたシナの華嚴經の靈地、五臺山大清凉寺を愛宕山に移そうと志すのである。五臺山は全佛教徒の尊信憧憬の聖地である。比叡山に於てすら、慈覺大師圓仁が五臺山に巡禮し、この聖地から傳えたという引聲念佛が、常行堂に修せらるべき天台の常行三昧行法に代つて行われ、よき音調に法悦する貴族を引きよせていた。天台教學を批判し超えるものとして大成したものが華嚴教學だと、シナの佛教史が示してさえいる。舊都の華嚴道場の學僧が指導權をにぎつて、比叡山に對立する新都の愛宕山が聖地五臺山化せられ、日本に初めての「生身釋迦如來の像」を本尊とした大清凉寺が出現する。それは正しく南都東大寺の新都進出であり、宿怨少なからざる北嶺教團へ對抗する有力な中央基地の造營である。

翌九八八年、未だ建設されぬ愛宕山の五臺山大清凉寺寺主に任ぜられている裔然は、清凉寺に戒壇を建置することにしたが、比叡山からの訴えで、取りやめざるを得なくなつた。戒壇こそは、かつて東大寺が比叡山から最大の苦盃をなめされたものである。比叡山に抵抗する東大寺僧の事業に、新都の對立戒壇を企劃するのも當然であつたかも知れぬが、これは裔然が功をあせりすぎて當時の情勢判斷を誤つたかの感が

ある。藤原貴族と直結して京都の權勢となつて全盛に赴いている比叡山を刺戟して、愛宕山の五臺山化へ強い壓力が加るべきことは寧ろ必然である。

翌九八九年には、裔然はまた延曆寺、元慶寺の例に準じて清凉寺に阿闍梨五人を給し、三密祕法を勤修して國家を鎮護するようせしめられたいと奏請した。ここにも比叡山に對する抵抗意識が露骨に出すぎている感がある。朝廷は五人を一人に減じて許され、その阿闍梨には、かねて裔然と愛宕建寺を手印結盟していた義藏が任命された（五月廿五日）。それは裔然並びにその密教の師である元杲大僧正（この年三月任命）の推薦によつたものである。

然るに一方では、この年五月元杲が大僧正の榮位を辭して京都から隱棲し、七月には裔然が東大寺別當に任ぜられ而も破損している東大寺伽藍の修治を命ぜられている。愛宕山新寺建立の大事業は一時延期せざるを得ぬ地位に、敬遠せられ去つたといえるであらう。而も裔然は東大寺別當就任早々に大風による東大寺南門等倒壊の不運にあい、更に翌年には末寺長谷寺を興福寺僧に押領せられる不幸失敗も起つてゐる。愛宕山の五臺山大清凉寺建設許可をうけて以來の裔然身邊に起つた諸事件を通じて、東大寺僧による愛宕の五臺山化に反對する比叡山を中心とした強大な權勢の壓力加重を讀みとることは不可能ではなからう。

なお、ここで東大寺乃至喬然一門の密教化を注意したい。

平安初期天台最澄と激しく對立した東大寺は、眞言空海とは極めて親近關係を結んだのみならず、時代の進みと共に東大寺への東寺、醍醐からの密教流入は著しくなり、喬然時代には東大寺、本寺は一體化するまでに密教化していた。東大寺のみでない。實は此頃には比叡の天台宗すら密教化し、密教主顯教（天台）従というが如き情勢にまで進みつつあつた。

蓋し天台の教理學やその實踐觀法は、京都貴族を必ずしも信者とする所以とならず、密教の修法こそは、貴族を檀越にする第一の近路であつた。密教の加持修法なしには、京都の佛教教團の繁榮は考えられなくなつた時代である。喬然もこれを忘れていぬ。彼の釋迦像に納めた願文には龍門に善無畏三藏の遺身を親しく拜して來たことや、汴京で密教の傳承をうけたことを特筆している。愛宕山も京都鎮護の法を修する密教の道場であることを示している。喬然の愛宕山清凉寺は、東大寺盧遮那佛分身釋迦として生身釋迦像を迎える華嚴思想に立ちつつも、密教化した東大寺教團の新都貴族社會進出を企劃したもので、彼の事業は東寺系佛教の後援で進められている。比叡山に對抗する爲には、當然の構想でもあつたであらう。

喬然は生涯の努力にもかかわらず、愛宕山大清凉寺は終に建たなかつた。彼死して（一〇一六）後、弟子盛算は重ねて

栖霞寺内釋迦堂を以て清凉寺と號せんことを請願して許可せられた。喬然三十五歳以來の愛宕山建寺の夢は、その山下の栖霞寺内に、彼があらゆる誓願をこめて將來し來つた優填王釋迦如來像を本尊とする清凉寺として現實となつた。釋迦像と共に將來した勅版大藏經は、あげて京都の全權を握つてゐる關白道長の法成寺に寄附せられた。釋迦堂に清凉寺の號を賜る爲の謝禮か、或は清凉寺造營の資金を得る爲か、或は藤原權門を清凉寺檀越に結びつける爲か、それとも三者をこめた理由から行われた寄附であつたかも知れぬ。

東大寺凉然の久しい誓願と努力は、比叡教團の壓力の下で二代かかつてやつと、愛宕山での源融家の寺院内に實を結んだ。しかしこの頃比叡教團は、上層僧の派閥勢力抗争や下部僧の武力化によつて内部崩壊を進めており、藤原貴族權勢も崩れ初めていた。これらの舊權勢の崩れた平安末期には、清釋寺釋迦像は廣く國民大衆の信者を集めて興隆し、鎌倉時代には南都佛教復興運動の本尊ともなつた。この日本佛教史を東大寺比叡山の兩教團抵抗意識の中に考えれば、その抵抗意識は青年層の立誓結盟狀をうみ、その結盟が喬然の入宋、釋迦像將來、清凉寺建立を展開したといつてよいであらう。

詳細は佛教文化研究四、「清凉寺釋迦像封藏の東大寺喬然の手印立誓書」を参照せられたい。